

第 8 回アライアンス支援技術シンポジウム

羽子岡 仁志
工作班 機械・回路工作係

1. 開催日程

日時:2019 年 11 月 12-13 日

場所:大阪大学産業科学研究所 管理棟講堂(開会式)

大阪大学産業科学研究所 第二研究棟 S-109(講演会場)

大阪大学産業科学研究所 インキュベーション棟 I-117(ポスター会場)

2. 開催概要

2019 年 11 月 12 日(火)-13 日(水)の二日間にかけて「第 7 回アライアンス若手研究交流会」、「第 8 回アライアンス技術支援シンポジウム」を大阪大学産業科学研究所の主催により合同開催した。附置研究所の若手教員 55 名、技術支援員 29 名、オブザーバー参加の教授 6 名、特別講演招待者 2 名、および当日参加者と学生らを含め、合計 95 名が参加した。第 8 回アライアンス技術支援シンポジウムに関する概要を以下に示す。

【プログラム】

11/12(火)	
12:30 受付開始	
13:00-13:30 開会式・写真撮影	
13:30-17:00 講演会	
11/13(水)	
8:40 受付開始	
9:00-10:30 ワークショップ	
10:30-12:00 施設見学	
12:00 閉会	

【参加者数】

所属	技術支援シンポジウム
北海道大学 電子科学研究所	3 名
東北大学 多元物質科学研究所	9 名
東京工業大学 すずかけ台分析部門	2 名
大阪大学 産業科学研究所	12 名
九州大学 先導物質科学研究所	3 名
合計	29 名

3. 内容

3-1. 開会式および写真撮影(合同)

開会式では、若手研究交流会実行委員長の後藤知代助教よりアライアンス若手研究交流会の開催趣旨説明があり、大西政義室長より技術支援シンポジウムの開催概要説明があった。続いて、産研の関野徹アライアンス運営委員長より開会のご挨拶をいただき、その後、若手研究交流会参加者、技術支援シンポジウム参加者、および全参加者の集合写真を撮影した。



3-2. 口頭発表(技術職員のみ)

口頭発表では各大学から発表があり、計 6 件の発表があった(発表順)

所属	名前	タイトル
大阪大学産業科学研究所	松下 雄貴	機械工作業務の実際
東京工業大学すずかけ台分析部門	清 悅久	脱水 γ -シクロデキストリンの構造解析
九州大学先導研究物質評価センター	松本 泰昌	機器共用化のながれと九大、先導研とこれから
大阪大学産業科学研究所	古川 和弥	L バンドビーム振り分けシステムの構築
東北大学多元研	秋山 拓己	学内他部局での研修報告—ICP 発光法をはじめとする元素定量分析のための試料前処理技術実技研修
北海道大学電子研	森 有子	イメージング解析グループの取り組み紹介

3-3. ポスター発表(合同)

ポスター発表では各大学から計 15 件の発表があった(ポスター番号順)

所属	名前	タイトル
大阪大学産業科学研究所	松崎 剛	有機微量元素分析ネットワークの紹介
九州大学先導研究物質評価センター	出田 圭子	石炭の分析に用いられる固体 NMR の手法
東北大学多元研	上石 正樹	収束電子回折図形による集束イオンビーム加工の評価
大阪大学産業科学研究所	奥村 由香	大阪大学における部局横断型女性技術職員ネットワークの設立と活動について
大阪大学産業科学研究所	榎原 昇一	浮力を利用した微小水性液滴の配置と組み合わせ
東北大学多元研	齋藤 琢也	高感度原子運動量分光装置の製作
大阪大学産業科学研究所	嵩原 綱吉	結晶スポンジ法による分子構造解析
大阪大学産業科学研究所	相原 千尋	リバースプロセスの活用について
東京工業大学すずかけ台分析部門	秋本 由佳	既存の FE-SEM を活用した新評価法 “SEM ベース DPC 法” の紹介
大阪大学産業科学研究所	岡田 宥平	電子式個人線量計の較正試験の現状
九州大学先導研究物質評価センター	田中 雄	筑紫地区先導研における建物セキュリティ対策
北海道大学電子研	武井 将志	当工作室における近年の取り組みについて
大阪大学産業科学研究所	羽子岡 仁志	X 線光電子分光法について
北海道大学電子研	富樫 愛采	当グループの取り組み紹介
大阪大学産業科学研究所	村上 洋輔	マイクロ粒子の TEM 用薄片試料作製法

3-3. ワークショップ(技術職員のみ)

ワークショップでは技術交流について、「分析」、「工作」、「情報」の分野に分かれて今後どのような交流をしていくのかなど話し合われた。

4. 結果と反省点

ワークショップで話し合われた技術交流について、各分野に分かれることにより非常に活発に、かつ掘り下げた議論がされたことは非常に良く、技術職員同士の交流がより深まったのではないかと思われる。その一方で、合同で行っているにかかわらず、若手研究者との交流は薄い気がした。来年度以降はこの点をもう少し改善したほうが良いのではないかと思われる。